家族支援の実践と人間関係の形成に関する研究Ⅰ
── カナダの家族支援プログラムの取り組みをふまえて ──

柴　田　崇　浩

要約

家族環境の近年の急激な変化に伴って、家族支援のニーズが高まっている。人が人を支援する家族支援では、いかに人間関係を形成するかが重要であるが、カナダの家族支援プログラムは、その概念的枠組をベースとして、多様な形式で家族支援の実践者が家族と良好な人間関係を形成するプログラムを提供する。

カナダの家族支援プログラムは、円環的な評価システムを採用し、プログラムの定義、基本理念、実践、成果をそれぞれの段階において再評価する。家族とのコミュニケーションや実践者チームの構成、家族支援の明確な目標を具体的に再設定することによって、サービスとして、家族に対して効果的なコミュニケーションを提供する。本稿は、実践者が家族と人間関係を形成するための要因が、意識的にカナダの家族支援活動に組み込まれている点を明らかにし、日本へのカナダの家族支援プログラム導入の有効性に言及した。

キーワード　カナダの家族支援、人間関係、Narrative、コミュニケーション

目次

1　はじめに
2　家族支援プログラムのサービスモデル
3　家族システムと家族支援
4　家族支援の概念的な枠組み
5　家族支援と人間関係の形成
　5.1　哲学：潜在能力を高めるアプローチ
　5.2　手法：ナラティブアプローチ（Narrative Approach）
　5.3　スキル：配慮ある質問
6　考察

1　はじめに

家族環境の近年の急激な変化に伴って、家族支援のニーズが高まっているが、人が人を支援する活動である家族支援において重要である人間関係の形成について、それがどのように現れているかといった研究はみられていない。そこで、今日の日本の家族の現状理解を試み、

主に家族支援先進国であるカナダの家族支援の理念と実践をふまえて、家族支援と人間関係の形成の要因と方法について明らかにしていきたい。

まず、家族支援を考えるうえで、“家族”とは何かを問うことは、支援すべき対象が何かということである。しかしながら、家族を明確に定義することは容易ではない。日本では伝統的な多世代同居家族から核家族へ移って久しいが、加えて、少子・高齢化が進み、さらに近年の日本の家族動向として、離婚率、再婚率の増加があげられる。過去15年間（1995年～2009年）の厚生労働省の統計をみると、婚姻件数は、70万件台でやや減少的な横ばいに推移しているのに対し、離婚件数は、平成8年（1996年）以降は毎年20万件台、平成11年（1999年）から平成21年（2009）までは、毎年25万件以上となっており、婚姻件数に比して離婚件数は増加傾向にある。有配偶者の離婚率に関してみると、特に子育て世代の離婚率は極めて高い。40歳未満の5歳階級の年齢別有配偶離婚率は、19歳以下で女性69.7％、男性43.3％、20歳から24歳で女性45.4％、男性46.9％、25歳から29歳で女性22.2％、男性23.58％、30歳から34歳で女性14.7％、男性11.5％、35歳から39歳で女性10.3％、男性11.5％である。

若年層のいわゆる“できちゃった婚”は、19歳以下で81.7％、20歳から24歳で58％（内閣府 平成17年版『国民生活白書』）と高い割合であり、離婚時に子どもがいる場合も多いことが推測される。実際に子ども（20歳未満）のいる夫婦の離婚件数は、2003年には17万件に達しており、離婚件数のうち6割を占める（厚生労働省「人口動態統計」）。

全体の結婚件数に対する再婚率は23.9％に達し、約4分の1を占める（厚生労働省「人口動態統計」）。前述のとおり、子どものいる離婚者が増加し、一方で再婚件数が増加している状況を考慮すると、子どもを伴った再婚が増加していることが予想される。こうした状況からステップファミリー（血縁を前提としない親子関係あるいは兄弟姉妹の関係のある“家族”）が増加していると推測される。したがって、子どもと家族を取り巻く環境は、欧米並みに複雑で多様な“家族”が形成されている現状がある。

2　家族支援プログラムのサービスモデル

家族は、時代や文化と共に多様かつ複雑に変化する性質を持つため、その支援目的も明確にしにくい。カナダの家族支援では“子どもの健全な成長と発達に重要な影響を与える文脈を提供する存在”（Ali, Corson, Frankel, 2009）と定義する。子どもを含む家族が見守られ、支えられて、自ら本来の力を発揮できるようにサポートすることが家族支援ということである。

家族支援という用語は、家族（または家族に準じる集団）への支援を総称する広義な意味で用いられる場合と、支援のプログラムやケアの手法、あるいは地域で自然発生的に行われている様々な実践例など、具体的な内容を示す意味で用いられる場合とがあるため、家族支援先進地域である北米のヒューマンサービスのプログラムをふまえて現状を考察したい。

ヒューマンサービスプログラムは、治療型、予防型、促進型モデルに分けられる（表1）。日本の地域臨床活動においては、治療型、予防型モデルが主流であり、促進型については、

表1　3種類のヒューマンサービスプログラム：治療型、予防型、促進型モデルの特徴

	治療型	予防型	促進型
定義	不調、病気、障害、問題が起きたあとにケアを行う	問題や悪いことが起こるのを遅らせたり妨げたりする	ポジティブな発達や能力の向上に努める
介入の中心	不調や病気やそれに関連する問題の影響を治療、改善する	悪い影響の拡大や発生を回避、減少させる	潜在能力を高め、問題の解決を容易にする
異なる特徴	悪い結果を減らすために矯正する	悪い結果を抑えようと防御する	適応能力と潜在能力を身につける
	阻害性	反応性	先見性
	障害型	弱点型	能力型
評価	「弱い」	「生活を脅かす」	「自己効果」
結果の一例	精神的ストレスを減少する	精神的ストレスを予防する	精神的に幸福度が高まる
	異常行動がなくなる	不適応を回避する	適応能力が高まる
	障害の合併症が最小限になる	病気を防ぐ	潜在能力が高まる

出典：Dunst CJ 1995年

主に援助活動における取り組み方針や態度、援助者の条件としての扱いに留まっている。子どもや家族において、問題が発生してから面接やカウンセリングなどで問題解決する（治療型モデル）よりは、問題が起きないような援助をする（予防型モデル）ことが一般に役立つと考えられ、予防を重視する姿勢はほとんどのヒューマンサービスプログラムに適用されている。一方で、家族の機能を高め、積極性や潜在能力を身につけて適応能力を強化する働きかけを行う促進型アプローチからすると、未然に災難や問題を防いでしまう予防は、家族の自らの力で問題解決をする機会を奪ってしまうことになるため、家族の積極的でポジティブな面を高めるのに必ずしも最適ではなくなる面がある。治療型、予防型、促進型のモデルは、それぞれ独自の理論的、概念的背景があって、優劣があるものではない。しかしながら、家族支援先進国であるカナダでは、その目標が、家族自身が持っている力を高めることで生活上の困難を乗り切ろうとすること、人そのものの発達を促進することであるので、促進型が採用されるに至っている。

3　家族システムと家族支援

ヒューマンサービスプログラムの3つのモデルのサービス提供方法はそれぞれ異なる面が多いが、アプローチに関しては、生態学的なシステム（ecological model, Bronfenbrenner 1979）の見方を重視するに至っている点で共通する。

生態学的なシステムは、家族をシステムの階層としてとらえ、家族内の影響がどのように生じ、また、いかに外的要因によって影響を受け変化するかの理解を促す。すなわち、子どもは、”家族、コミュニティ、そして、より大きな社会文化的な環境といったシステムの階層の中にあって、それぞれの階層と相互に多角的に関係して形成されるということである”（Ali, Corson, Frankel, 2009）。たとえば、家族支援の被支援者は、多くの場合、娘や息子、あるいは母や父という役割を担っている。つまり、家族というシステムの構成員であり、

そのシステムの中の相互的な関わりによって変化をもたらされている。たとえば、養育者は、子どもと直接的にかかわりを持って影響するだけでなく、子どもと学校や地域の人々の間に介在し、それらの子どもの影響をとりなすのである。被支援者をサポートする家族支援とは、狭義に“家族システムの相互関係にいる人を支える”（伊藤、2004）ことである。

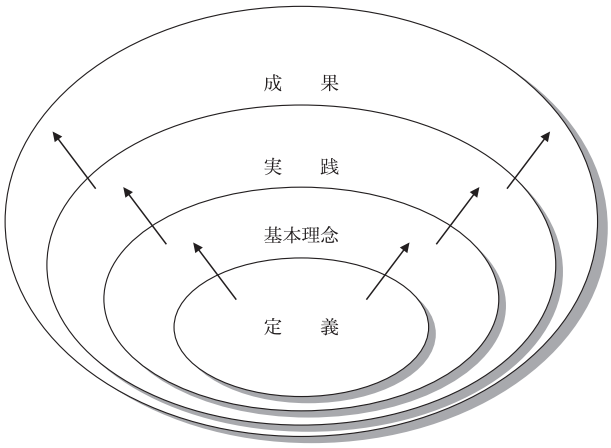
4　家族支援の概念的な枠組み

大島（2004）によると、家族支援を提供しにくい3点の主な理由がある。1つ目は、家族が主体的に援助希求をとりにくいという問題である。家族メンバーが家族内に精神的な問題を生じてしまった場合、一般に自責感を持つ場合が多く、支援を求めることを躊躇する。また、周囲の人々の偏見やスティグマにさらされて、家族が孤立しがちであるため、援助希求行動をとりにくいという。2つ目は、家族は問題に翻弄されたり、家族ケアにおわれたりするため、専門機関へ援助を求める余裕が持ちにくい点である。3つ目は、家族や地域の精神保健問題に対する科学的知識や情報が不十分であることが、専門機関の利用を困難にしているという点である。

このような家族支援に関する様々な課題に対して、カナダの家族支援は、シンプルな概念的な枠組み（conceptual framework）（図1参照）を用いた実践活動に早くから取り組み、効果的な成果を挙げている。

カナダの家族支援は、その中核となる定義から基本理念が決定され、基本理念に沿って実践が行われる。実践は、何らかの成果を伴うのである。この中心円からなる枠組みを利用するメリットは、中核となる定義が成果を伴うまでに、どの同心円の段階でどんな影響があるか検証する際に役立つのである。前述の日本で家族支援を提供しにくい理由に関しても、概念的な枠組みの発達段階に照らし合わせて精査を試みれば、定義の段階に課題が含まれてい

図1　カナダ家族支援プログラム　概念的枠組みの発達段階



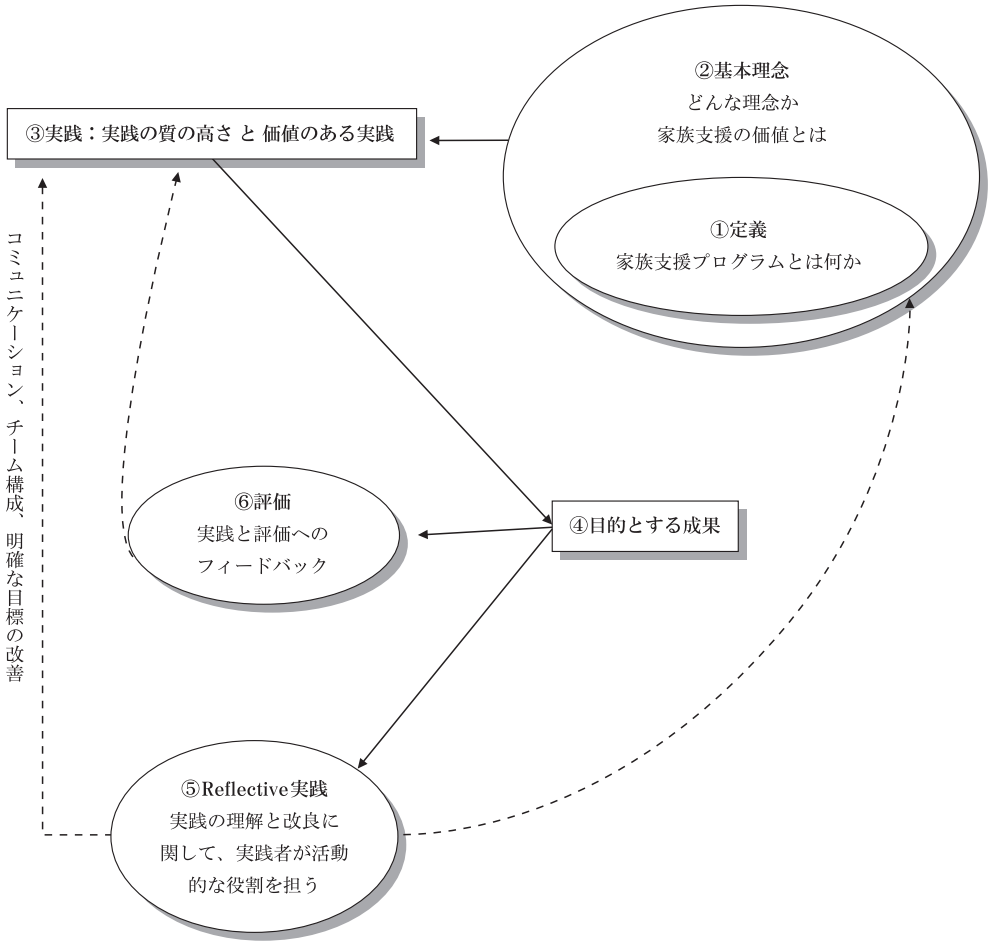
出典：Malcomson 2002年より作成

たのか、基本理念に不足がみられたか、実践のおいて不都合や問題があったのか、あるいは、単なるイレギュラーな成果であったのか、家族支援プログラムを詳細に検討・評価することが可能となるのである。

家族支援の評価がなされ、課題や問題点が浮き彫りになると、次に概念的な枠組みの評価及び検証を行い、新たな家族支援プログラムを作成する手続きを、円環的な実践・評価システムによってプログラムの再作成が可能となる（図2参照）。

家族支援プログラム作成は、すでに継続して行われている様々なプログラムの実践の成果に関する課題や問題点を検証し、家族支援プログラムの概念的枠組みを各段階において、多角的に再検討する。基本的な流れとしては、①家族支援プログラムとは何かといった、根源的な定義を検証し再構成するに伴い、②家族支援の価値を改めて問い、必要とされる新しい理念を創造して、基本理念を決定する。③基本理念に基づいた質の高い、価値のある実践の

図2　家族支援プログラム作成のための概念的な枠組み



出典：Malcomson 2002年より作成

検討と構成を行い、④目標とする実践の成果を決定する。⑤目標とする成果を達成すべく、家族支援プログラムを実践することになるが、現場の家族関係の状況を理解し、適時プログラム運用を調整する役割を実践者が担う。実践者から、プログラムの実践報告と評価を受けて、より価値ある実践を伴う家族支援となるように、時には定義や基本理念を再評価し、念入りな検討をもとに適切な家族支援を方向付ける。また、⑥目標となる成果を達成する、価値のある家族支援の実践であったかを評価して、実践者と家族との間に適切なコミュニケーションがなされていたのか、妥当な実践者のチーム構成であったのか、家族支援の目標は明確であり、プログラムが有効に機能していたのかを評価し、プログラムの変更や修正、追加を行っていくのである。これら①から⑥の要素は相互に関係してつながり、根本的な家族支援の価値や原理、位置づけに導かれて全体の枠組みを構成するという、統合された家族支援の概念的枠組みを示している。

このような概念的な枠組みを用いた家族支援の取り組みは、家族や学校、地域社会などの多様で多重な現実環境に生活し、社会・文化的状況によって支援のニーズが変わる可能性のある子どもと家族の支援において、柔軟かつ効果的な支援を提供する点で優れている。また、家族支援プログラムの実践の基本にコミュニケーションがあり、実践報告と評価によって、コミュニケーションの改善が行われるのは非常に重要であると考える。なぜなら、家族支援は、社会的文脈の中の存在として家族メンバーをとらえ、そのごくありふれた日常生活における家族内外の相互的な人間関係を理解し、その理解に基づいた援助方法を実践していく専門的な取り組みであるゆえ、家族支援そのものが、専門家が家族とかかわりをもつという、人間関係を形成する場でもあるためである。そのようにとらえた場合、家族支援の現場では、親とサービス提供者、子とサービス提供者、子どもと親、子ども同士、親同士というような人間関係が、早期にかつ自然に形成され得る具体的なプロセスや手法がサービスとして提供されていることが重要である。

5　家族支援と人間関係の形成

上述の人間関係を形成するプロセスは、促進型モデルを採用するカナダの家族支援では専門的に提供される“サービス”としての特徴が強く現れている。家族支援に関わる人の呼称に関してもそれは現れており、スタッフは、サービス提供者（service provider）、実践者（practitioner）、あるいは専門家（profession）などの用語が用いられる。サービスは、家族支援の指針や実践において、最も基本的な“意識的な態度やコミュニケーション”として提供されている。例として、家族支援の実践者が、家族とかかわりを持つことに関して、「積極的な関与の促進（Promote Engagement）」という12項目の活動のキーポイントを挙げる（表2）。

カナダの家族支援プログラムは、地域の家族が気軽に集まることができるドロップイン（drop-in :人が集まるところ、たまり場）のサービスプログラムとして展開されており、継続的な地域密着型の支援活動であるといえる。そのため、サービス提供者と家族の人間関係

表2　積極的な関与の促進（Promote Engagement）

	家族支援プログラムにおける日常の流れ
1）スタッフは、訪れたすべての人に、フレンドリーに接し、すぐに、“ようこそいらっしゃいました”“来てくれてありがとう”の気持ちを言葉や態度で表現する 2）スタッフは名札をつけ、参加者の来訪時に自己紹介する 3）参加する家族ができるだけ早く（2、3分）落ち着けるように、飲み物を勧めたり、施設を案内したりする 4）家族の多様性を受け入れる	“家族との接触”（connection）
5）家族が安らぎを感じるような室内の雰囲気作り（内装や装飾、サウンドなどの環境づくり）をし、静かな区切られた空間や個室を用意する 6）参加する家族に対して、情報提供や他機関へ委託、紹介を行う 7）肯定的に家族を理解する 8）家族が尊重し合えるように、家族に生じた問題ついて、話し合いの仕方など、役立つ方法を提示する 9）配慮のある質問（appreciative inquiry）を行う：家族への配慮ある質問は、可能性をよく考えるようになり、家族に与えられた可能性や強さを発見することにつながる 10）人間関係の信頼の感覚はスタッフからも学ぶ	“一連の行為”（process）
11）参加する家族の興味を考慮し、プログラムの大切さを伝え、家族の積極的な参加を促進する 12）長期的な関係を持つことを前提に家族とかかわる	“つながり”（network）

カナダ ファミリーリソースプログラム「A DAY IN THE LIFE」より作成

は、このような地域密着型の特性をふまえ、長期的にかかわること、家族と信頼関係を築くこと、また、「10）人間関係の信頼の感覚はスタッフからも学ぶ」とあるように、スタッフ自身もその場にいる人間として家族に影響を与える存在であることを強調している。

家族支援プログラムでは、実践者・スタッフと家族の間の日常の流れとして、“家族との接触”（connection）、“一連の行為”（process）、“つながり”（network）が継続的、持続的に生じている。この日常の流れに即して、表2の1）～4）の内容が“家族との接触”、5）～10）が“一連の行為”、11）～12）が“つながり”にそれぞれ対応した具体的な指針であることが理解できる。家族支援は、養育者のサポートに焦点をあてて健全な子育てを支援するために、家族のつながりや関係性を促進するものであるから、その本来の目的を促進するためには、家族支援の実践者あるいはスタッフは、家族支援プログラムへの参加家族と良好な人間関係を形成し、基本的な信頼関係を築くことが求められる。そのための実践者に必要とされる具体的な社会的スキルが、指針として明示されている。

家族が初めて参加する、積極的な関与の促進に挙げられた項目は、支援活動の過程において、支援者と家族の関係が迅速に自然な形で良好になることに焦点をあて、雰囲気づくりやサービスの提供、サービス提供者の家族への接し方、家族の居心地のよさ、家族のプログラム利用の促進について明示している。これらのサービス要因は、家族支援の哲学、手法、スキルを背景にして、相互に有機的に関連して機能するので、次に紹介したい。

5.1　哲学：潜在能力を高めるアプローチ

カナダの家族支援の主な実践的なアプローチに潜在能力を高めるアプローチがある。真に家族の多様性を受け入れる行為は、すべての家族に力が備わっているという認識をもつことが前提となってはじめて成立する。家族の力は、家族の信念、文化的背景、経済的生活水準によって影響を受けるが、どのような家族にも長所があり、弱点を直すことより、長所をサポートすることに重点を置いて、子どもや家族の生活に変化をもたらす機会を増やすのが、家族支援の潜在能力を高めるアプローチである。潜在能力を高めるアプローチでは、家族が力を発揮できない場合、社会的制度や社会的組織（ヒューマンサービスプログラム等）の問題のために、家族が能力を発揮したり、習得したりする機会がなかったという視点から、家族とかかわりをもって支援を試みる。この試みには、人の人生の重大な局面に対して、能力を高めて積極的に取り組むとするエンパワーメントの理念が根底にあり、人間そのものの発達を意味する。人間そのものの発達を促進すると、自己効力感や自立、ポジティブな心、積極性、能力を身につけることになり、家族の力が高まって、家族が直面する危機的な局面に対して影響を及ぼすようになる（Dumst 1995）。潜在能力を高めるアプローチの根底にある、人間そのものの発達を支援するという人間感を持って、家族支援のサービス提供者が家族にかかわりを持つ場合、サービス提供者は家族に対してより共感的で、尊重した態度を自然にとるようになる。したがって、家族支援のサービス提供者が、潜在能力を高めるアプローチを前提に、家族の様々な能力をありのままに受けいれ、その機能を高める手伝いをすることで、結果として、子育て力も高めるという一連の取り組みは、本当の意味で支援と呼べるものとなるであろう。

5.2　手法：ナラティブアプローチ（Narrative Approach）

家族支援において、支援者が家族と人間関係を形成し、プログラムにおいて一連の過程を共有する場合に中核をなす手法はナラティブアプローチである。ナラティブアプローチの概念は、海外において、その統一見解は未だみられておらず、日本でナラティブとそのまま記載したり、訳語の“物語”を用いる場合がみうけられる。Aliら（2009）は、NarrativeとStoryが相互に用いられる現状があるが、単に思い出された経験内容を列挙することに限定されたStoryとは異なり、Narrativeは、語り手が出来事や個人的な経験の意味を理解する包括的なプロセスを現す用語だと述べている。これらを考慮し、本稿では、用語の持つ意味や文脈を損なわないよう、Narrativeと記載する。

家族のNarrativeは、語り手としての家族と、聴き手としての支援者の相互作用である。Narrativeは、状況や出来事についての情報を、説明を含んで詳細に提供する、古くから確立されたコミュニケーションの形式である（Ali, Corson, Frankel, 2009）。そして同時に、Narrativeは、個人や家族が、いかに社会的交流をとらえているか、過去からどのようなことを学んだか、将来どのようなことを予想しているかを反映するものである（Fiese and Spagnola, 2005）。このようなNarrativeの性質は、語り手である親や家族構成員に対し

て、内省する機会を与えることになり、結果的に語り手に対して、同じ問題でも多様な見方があることを啓発することになる。したがって、“Narrativeを通して物語を共有することは、他の人々の人生を経験することと同じになるので、語り手は大きな意味を持つことになる”（Scott, 2001）のである。

家族のNarrativeを用いるということは、サービスの提供者は、家族によって異なるNarrativeに常に接する機会があるため、新しいパラダイムを受け入れる準備をもっていなければならない。そのため、サービス提供者は、家族のNarrativeに傾聴することが最も基本的かつ重要な実践である。傾聴は、目線を合わせて相槌をうったりするように、聴き手が積極的に働きかけている場合でも、つらい話に合わせて沈黙を守っているように、話しを静かに聴いているだけの場合でも、語り手に本心から肯定的な関心をもっていることが伝わるように振舞い、家族に対して共感の気持ちが伝わるように行わなければならない（表3）。このためには、聴き手は、サービスの提供者として、アドバイスを与えたり、分析したり、判断したりしたくなる気持ちが沸きあがるが、その気持ちに耐えて傾聴することが大切である。

表3　家族とのかかわりの留意点

・自分の判断を留保し、家族のものがたりに共感して傾聴する
・家族の強さやリソース、価値観、優先事項が何であるか分かる
・文化的多様性を尊重し、よい親でありたいという願望を尊重する
・情報や資源、意思決定を共有する

Ali, Corson, Frankel　2009 より作成

家族が率先して自らのアイデアを話したり、出来事や経験について事細かに伝えてきたりするような、望ましい家族のNarrativeを促進するためには、サービスの提供者が傾聴するうえで、適切な態度やコミュニケーションが不可欠である。それらNarativeを支えるサービス提供者の主な手法として、“ミラーリング”、“感情認知”、“自己開示”、“沈黙の尊重”が含まれる。

ミラーリング（Mirroring）は、家族のNarrativeを傾聴する際に、サービスの提供者が、言葉や声のトーン、ボディランゲージを用いて、家族のNarrativeを正確に反映する、あるいは描写することで、Narrativeの話者に対して、肯定的に関与していることや共感していることを示すことができる手法である。家族は、独自の言葉で実践者に話しかけてくるので、その家族独自の主な語句やアイデアを繰り返して伝えることは、実践者が家族のNarrativeに高い関心を持ち、重要だと理解していることを伝えることになるのである。その結果、家族は自らのNarrativeをより広く展開し、自ら修整し、話の意図をより理解できるように適合させていけるようになるのである。

感情認知とは、家族のノン・バーバルに表現された感情を把握し、その把握した感情をサービス提供者がバーバル（口頭）で家族に伝える手法である。話し手である家族が、話しながら、目に涙を浮かべたり、肩を小刻みに震わせたりする様子から、「お子さんのことで

さぞ悲しんでおられるのでしょう」「そのようにお怒りになられるのはもっともなことですね」など、話の内容にそった悲しみや怒りをサービス提供者が家族に伝えることは、思いやりを示すことにもなるのである。

また、家族のNarrativeに類似した話や自らの経験を、サービス提供者が家族に伝える自己開示も、家族に対する共感的な態度を示すことになる。自己開示は、場合によって、サービス提供者が必死になってしまうことがある。そのため、あくまで家族のNarrativeがサービス提供者と家族の面接の中心であるように、程度をわきまえて自己開示がなされることが望ましい。

会話が流暢にやり取りされていることばかりが、家族のNarrativeではない。話し手である家族は、すぐに話し出すのではなく、しばしばNarrativeの内容を振り返り、熟考し、考え方や感情を構成し直す時間を必要とする。サービス提供者が、沈黙を恐れて矢継ぎ早に質問を投げかけることは、時に話し手に侵襲的で、サービス提供者が家族のNarrativeに関心がないのだと間違った理解を家族に思わせてしまうことがある。サービス提供者は、沈黙が家族のNarrativeに重要で必要であることを理解し尊重する寛容さが求められるのである。

このように家族のNarrativeを中心とした面接は、様々な手法を用いて実践される。そして、家族は、新しいサービスの選択肢や今までのやり方から、あらためて、家族の力や信条、願望をつくりあげるのである（Ali, Corson, Frankel, 2009）。

5. 3　スキル：配慮ある質問

家族支援者が、家族へアプローチする場合、面接の形式となることは一般的である。面接による家族のNarrativeは、家族のニーズや欠点、あるいは機能不全を決定するためのものではなく、家族の声に傾聴するためにあることを留意したい。

家族にとってよい聴き手であるためには、“よい問いかけ”や“よい質問”を投げかけることも重要である。すなわち、サービス提供者が家族に質問することである。面接場面における質問は、語り手の話を聴き手が誘導したり指導したりするものではない。語り手が物語や感情、考え方が展開するように、聴き手が語り手にとって重要な点を強調したり、話題を考察するために、聴き手が尋ねることで語り手が詳細を述べられるようにしたり、不明瞭な話の内容を明確になるようにしたりする。このような質問を“配慮ある質問”（appreciative inquiry）といい、具体的には次のような質問があげられる。

＜“配慮ある質問”の例＞

・「それについてもっと話してくれませんか」
・「例をあげてもらうことはできますか」
・「現在はそのことについてどのように思われていますか」
・「何か他に話しておきたいことがありますか」

これらの質問は、用いれば必ずよいというものではなく、家族面接の中で、家族の語り手の質問による導き方や導きの方向性、語り手と聴き手の関係性、そして、サービス提供者の専門性に見合った情報の種類に対応して、柔軟に修正して用いる必要がある。

6　考察

現在の家族を取り巻く環境は、少子・高齢化、離婚・再婚率の増加等によって、複雑で多様なものへと急激に変容してきている。旧来、子どもを含めた家族の健康や発達に対しては、家族と地域が大きくその責任を果たしてきたが、ひとり親、ステップファミリーの増加等の統計を見ると、家族に従来にない変化がもたらされていると推測する。今日の家族の変化が、歴史的な家族の変遷の結果であるからして、旧来の“よき家庭”を取り戻すというような、原点回帰を想定した支援は、何かしらの示唆が与えられる可能性はあるが、問題の根本的な修正や解決にはいたらないと予測する。

このような日本の状況に対し、カナダの家族支援プログラムは、新しい家族支援のパラダイムを提供し、有効に機能する可能性を秘めている。カナダの家族支援プログラムは、明確な理念と概念的枠組みによって、プログラムを運用、評価、再構成する一連のプログラム評価プロセスを行う。このような家族支援の実践に関する哲学ともいえる、強固な活動指針をプログラムは採用しているため、多民族国家として異なる思想、民族、文化、経済水準を持った多様な家族の支援ニーズが地域社会にあっても、その家族支援は、条件に応じて柔軟にプログラムを構成し、家族の満足度が高い有効な支援サービスを提供することができるのである。このようにカナダの家族支援プログラムは、地域差や文化差にとらわれず柔軟に地域に根付いた、具体的かつ効果的な家族支援の実践を提供することが可能であるため、日本に導入されたとして、日本の文化的多様性を肯定的に取り入れたプログラムの構築が可能であると考える。また、日本への導入後、プログラムを運用して積み重ねた実践成果を反映していくことで、日本独自のプログラムを作成していくことも可能になると考える。

近年、子どものコミュニケーション力の低下などから、子どもの社会化、社会参加の重要性が叫ばれている。一方で、親の社会スキルの低下も指摘されているが、社会とは狭義に人間関係であることを強調しておきたい。「相手の気もちが分かる」、「思いやりをもつ」、「信頼する」といった、我々が前提とする人間関係は、経験や学習によるものが大きいかもしれない。たとえば、「相手の気持ちがわかる」には、相手と話してどのようなことがあって、どのような気持ちでいるかと聴いて知ることが必要である。また、その相手との対話の過程では、話しているときの表情や態度を観察してサインを読み取り、「楽しそう」、「落ち込んでいそう」、「疲れてそう」など、視覚情報から推測して、相手に実際に「何かあったの？」や「疲れてない？」といった問いかけをして確認するといった一連の相互的な過程があって、相手の気持ちを実際に知ることにもなる。このような人間関係におけるコミュニケーションは、至って一般的になされていることと思われてきたが、近年は年齢を問わず、「相手と何を話したらいいかわからない」「相手の気持ちがわからない」ため、人間関係に疲れると

いった声をよく耳にする。このような現状をふまえて、教育現場や社会人の環境においてもコミュニケーションスキルの獲得を目指した学習機会を提供する傾向にある。カナダの家族支援プログラムにおいては、このようなコミュニケーションに通じる学習や教育のノウハウは、日本と同じように、早期（乳幼児期）教育プログラムや親教育プログラムとして提供されている。加えて、上述のとおり、ドロップインなどの日常の支援活動の中に、意識的にコミュニケーションのノウハウが組み込まれているので、子どもや家族がコミュニケーションを学習する機会が自然に増えることになっている。本来コミュニケーションが、教育という限定された場面で提供される性質のものではなく、日常のプロセスに存在するものであるから、ドロップインなどの生活の中に意識的に組み込まれて、家族により多くの学びの機会を提供しているという事実は、人間関係の希薄さ、家族の孤立化が叫ばれている日本においても参考になる実践であると考える。

地域社会は、既存のものが前提であるように思われるが、実際は新しい内外の要因が加わって、常に変容していく性質のものである。カナダの家族支援プログラムが、地域に導入され、ドロップイン等で地域の家族と交流する。その中で、家族が“人間関係の信頼の感覚をスタッフから学ぶ”のであれば、サービス提供者の願望が多分に含まれてはいるが、新しい“地域社会（＝地域の人間関係）”が形成されることになろう。その家族が学んだ人間関係は、子どもに伝わり、他の親や家族に伝わり、それら子どもや家族の本来の力を発揮する力になるであろう。

一方で、カナダの家族支援を日本へ導入する際の大きな課題もある。それは、家族支援プログラムの概念的枠組みの“正確”な導入である。家族支援は、家族が地域社会、文化、経済水準、時代等の様々な要因によって多様な形式を示し、その支援ニーズも多様であるため支援の焦点が定まりにくい。そのような状況に対して、支援ニーズに応えるままに家族支援を試みるとすると、当面の問題は解決できるかもしれないが、その場しのぎの、場当たり的な対応になってしまう可能性が多分にある。家族は地域社会において刻々と変化する日常の中で、日々直面する問題に取り組み、変容を遂げているので、家族支援は、計画的で、長期にわたって提供されなければならない。この課題に対し、カナダの家族支援のプログラムは、対応可能であるが、強固な“概念的枠組み”によるプログラム運用が前提である。従って、日本への導入は、概念的枠組み（定義、基本的理念、実践、成果の一連のプログラムの実践と評価システム）をいかに正確に導入するのか、そして、それを地域の家族支援活動にいかに浸透させて、実践者の中で“自然に”運用されるようになるかが、重要なポイントとなるであろう。この点の課題については、別の機会に考察を試みたい。

参考文献

(1) Ali, Mehrunnisa. Corson, Patricia. Frankel, Elaine. Listening to Families: Reframing Services Chestnut Publishin; 2009

(2) Bronfenbrenner U. The ecology of human development: experiments by nature and design. Cambridge, MA: Harvard University Press; 1979.（磯貝芳郎・福富護訳『人間発達の生態学』川島書店、1992）

(3) Cowen, E. L. The enhancement of psychological wellness: Challenges and opportunities. American Journal of Community Psychology, 22, 149-179. 1994.

(4) Dunst CJ. Key characteristics and features of community-based family support programs. Chicago, Ill: Family Resource Coalition, Best Practices Project; 1995.

(5) Family Resouce Program. A DAY IN THE LIFE. DVD. Family Resouce Program. 2008

(6) Fiese, B. H., & Spagnola, M. Narratives in and about families: A critical look at definitions, methods, and application to family psychology. Journal of Family Psychology,19, 51-61. 2005.

(7) Hinyard, L.J., Kreuter, M.W. Using narrative communication as a tool for health behavior change: A conceptual, theoretical, and empirical overview. Health Education and Behavior, 34 (5), 777-792. 2007.

(8) Malcolmson, John. Putting the Pieces Together A Conceptual Framework for Family Support Practice. FRP Canada. 2002.

(9) Scott, C. Caring narratives and the strategy of presence: narrative communication in nursing practice and research, Nurs Sci Q, 14, 249-254, 2001.

(10) 伊藤順一郎、『コミュニティにおける家族支援－技法，哲学，システム』、家族療法研究、21（3）、pp205-209、2004

(11) 大島　巌、『コミュニティにおける家族支援：「アウトリーチ家族支援」のニーズと援助方法をめぐって』家族療法研究、21（3）、pp210-212、2004

(12) 厚生労働省　平成21年人口動態統計の年間推計　http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei09/

(13) 厚生労働省　平成21年度「離婚に関する統計」の概況　http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/rikon10/01.html

(14) 国立社会保障・人口問題研究所　人口統計資料集　2010年　http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2010.asp?chap=0

(15) 内閣府　平成17年版『国民生活白書』「暮らしと社会」シリーズ　http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/01_honpen/index.html

(16) 橋本やよい『母親面接のNarrativeについて』心理臨床学研究、日本心理臨床学会、pp623-634、1998

(17) 山本和郎、コミュニティ心理学―地域臨床の理論と実践、東京大学出版会、1986

(18) 山本和郎・原裕視・箕口雅博・久田満編、臨床・コミュニティ心理学―臨床心理学的地域援助の基礎知識、ミネルヴァ書房、1995

(19) 山本和郎編、臨床心理学的地域援助の展開―コミュニティ心理学の実践と今日的課題、培風館、2001

Summary

Study of Promoting Human Relationship in Family Support Practice
— Based on Practices in Family Support Program in Canada —

Takahiro Shibata

The necessity of family support is increased as recent years have seen the radical change in domestic settings and family environment. In offering family support, it is important to establish and promote positive human relationships. Family Support Program in Canada, based on their unique conceptual framework on its practice, provides programs that facilitate constructive relationships between practitioners and families in various flexible ways. It adopts a reflective evaluation system, in which the definitions of programs, guiding principles, practices and outcomes are repeatedly and reflectively evaluated at each stage. By resetting and reformulating communication with the family, the composition of the practitioners' team, specific goals for the support, they can offer effective services implemented through communication focusing on the family in real life.

This article shows that elements that are important for practitioners to establish positive relationships with families are deliberately built into the family support in Canada, and that it is promising and even necessary to introduce family support programs practiced in Canada into Japan.

Keywords Canadian Family Support, Human Relationship, Narrative, Communication

(2010年11月1日受領)